

# 3

## WINSTON CHURCHILL

### ——戦う人、語る人

後藤 春美（東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 教授）

皆様、こんにちは。東京大学大学院総合文化研究科・教養学部の後藤春美と申します。

松方さん、水野さんのご報告に続いて、私は第二次世界大戦中にイギリス首相であったウィンストン・チャーチルを取り上げたいと思います。

#### 「戦う人」としてのイギリスの王族、貴族

チャーチルは、本日の共通テーマである、「語る」ということによって力を得たのですが、それを下支えするものとしては、松方さんのお話に出てきたもう一つの動詞、「戦う」があったと思われます。

この写真は第二次世界大戦中、1941年12月30日に撮影されたチャーチルです。怒ったブルドックのような表情とされています。



1941年12月30日に撮影されたチャーチル

出典：Wikimedia Commons (Winston Churchill)

チャーチルは、イギリス・オクスフォードの近くにあるブレニム・パレスという大きな館で生まれました。現在は参観したり、庭を散策したりできますので、いらしたことがある方もいらっしゃるかも知れません。

ブレニム・パレスは、モールバラ公爵の館です。チャーチルの父はモールバラ公爵家の三男として生まれました。三男はモールバラ公爵にはならないので、ブレニム・パレスはチャーチルの家だったわけではありませんが、両親がここ、つまり親戚の家を訪問している最中に生まれたのです。

また、どうしてブレニム・パレスという名前がついているかということ、モールバラ公爵家初代のジョン・チャーチルが、18世紀初頭、ヨーロッパ大陸のスペイン継承戦争、とくにブレンハイムの戦いで活躍したからです。

イギリスの王族、貴族は元来「戦う人」という特質を持っています。

ウィンストン・チャーチルは、ハロー校というパブリック・スクールを卒業した後、サンドハーストのRoyal Military Academy、陸軍の学校に行っています。小さな頃はおもちゃの兵隊で遊ぶのが好きだった一方、あまり勉強は得意ではなかったからのようです。この学校は、近年何かと話題のハリー王子も行ったところ。「戦う人」という王族・貴族の伝統に則っていますね。

ただし、チャーチルの目標は軍人として出世することではなく、政治家になることでした。そのためには、選挙で選ばれなければなりません。チャーチルは、勉強は得意ではなかったといっても、自分の母語である英語は得意で、文章を書くのも上手でした。そこで、軍人として勤務していたインドから紛争のレポートを新聞に送るなどの活動をしていました。

1899年から1902年の南アフリカ戦争の際には、戦時特派員として南アフリカに赴きました。そこで、彼は何と捕虜になってしまいます。しかし、脱出に成功し、その体験を記事にすることで注目を集め、名前が売れ、議員になることに成功しました。

イギリスの議会では、「語る」ことが重要です。議場は、政権についている政党と反対党が、言葉によって「戦う」場であるとも言えましょう。チャーチルは演説も得意でした。ただし、空ですらすらと言葉が出てきたわけではありません。議員になったばかりの頃、原稿を準備せずに演説して、途中で頭が真っ白になったという経験もしていました。ですので、チャーチルは、得意の文章力を生かしてあらかじめ原稿を書き、それに基づいて演説するというスタイルを取るようになりました。

チャーチルは政治家として常に正しい判断ができた訳ではありませんでした。第一次世界大戦中の1915年には、オスマン帝国に対するガリポリ上陸作戦を立て

たのですが、これが大失敗となり、何万人もの兵士が亡くなり、海軍大臣を辞任した経験もありました。1920年代半ばには、財務大臣の職に就いたのですが、通貨ポンドを過大評価して金本位制に復帰するという政策をとり、輸出のできなくなったイギリス経済を苦境に追いやってしまいました。

このような判断ミスがいくつかあったため、1930年代には、チャーチルは要職に就くことはありませんでした。第一次世界大戦において多数の死傷者を出したイギリスは、できる限り2度目の大戦争は避けたいと考えていました。そのため、1930年代には「戦う人」はあまり歓迎されなかったのです。

この時期、時間のあったチャーチルは得意の文章力を生かして、作家のような活動にも時間を費やしていました。

### 「戦う人」チャーチルの戦時のスピーチ

チャーチルがついに首相になったのは、1940年5月でした。戦争を避けるためドイツをなだめる宥和政策が失敗し、1930年代に要職に就いていなかったチャーチルに機会が訪れたのです。

ただし、これはイギリスにとって、非常に暗い日々でした。

すでに第二次世界大戦が始まっており、ヨーロッパ大陸ではドイツ軍が破竹の



リヴァプールで港湾労働者たちに向けて演説をするチャーチル

出典：Wikimedia Commons (Winston Churchill)

勢いで、オランダ軍は降伏し、ベルギーにいた英仏軍も分断されるという状況にありました。イギリスの大陸派遣軍は海岸を目指して退却し、5月27日には、ダンケルクから撤退します。

さらに7月から8月にかけては、ドイツ軍がイギリスを空襲しました。子供たちはロンドンを離れて田舎に疎開して行きました。

このような状況で、チャーチルは、議会での演説によって、またラジオを通して国民に語りかけ、戦意を鼓舞しました。

23頁の写真は、1941年4月にリヴァプールで、商船の乗組員や港湾労働者に向けて演説をするチャーチルです。この時には、大西洋での戦いにおける船員や労働者の貢献に感謝の言葉も述べたとのこと。

時間は後先になりますが、1940年6月4日に議会で行った有名な演説の一部をご紹介します。

‘We shall go on to the end. We shall fight in France, we shall fight on the seas and oceans, we shall fight with growing confidence and growing strength in the air, we shall defend our island, whatever the cost may be. We shall fight on the beaches, we shall fight on the landing grounds, we shall fight in the fields and in the streets, we shall fight in the hills; we shall never surrender’.

「われわれは最後まで戦い続ける。フランスで、海で、そして募りゆく自信と戦力でもって空で戦う。いかなる犠牲を払っても、われわれの島国を守るであろう。海岸で、上陸地点で、平原と街路で、そして高地で戦う。われわれは決して降伏しない。」(河合秀和『チャーチル』中公新書、1979年、270頁<sup>1)</sup>)

「戦う人」チャーチルの戦時におけるスピーチです。

今回、「語る」ということを考える機会を得、このスピーチについても考えたのですが、これは、チャーチルが国民の戦意を鼓舞したのと同時に、この時に、「聞き手」であったイギリス国民が「聞きたかった」スピーチでもあったのではないかと考えます。1930年代のイギリス人は平和を求めたのですが、1940年、すでに戦争は始まってしまっています。

1 なお、この書には増補版もある。

チャーチルは、聞き手に、「自分たちと同様、あるいはより明瞭に状況を理解している」と感じさせ、聞き手が、漠然と、こうなると良いと思っていた状況を、「我々は決して降伏しない」ということを力強く明瞭に語ったのではないのでしょうか？ そのことで、聞き手は、チャーチルが戦いをそのように率いてくれるだろうという信頼を持ったのではないのでしょうか？

## 時代による変化

一方、聞き手が聞きたい内容は時代によって変化します。戦争が終わって時間がたった後、イギリスの若い人たちはチャーチルのスピーチを聞いても当時の聴衆と同じような反応はしなかったということも知られています。先ほど松方さんから、「2021年の私たちとの関連から考える」というお話がありました。そこで、2020年4月5日のエリザベス2世女王のスピーチも紹介したいと思います。これは、イギリスで新型コロナウイルスが急に広がり始め、ロックダウンとなり、チャーチルのように国民を勇気づけるはずの首相ボリス・ジョンソンもコロナに感染してしまった頃です。

女王はここで、チャーチルが先ほどのスピーチを行った1940年について語り始めます。

It reminds me of the very first broadcast I made in 1940, helped by my sister. We as children spoke from here at Windsor to children who had been evacuated from their homes and sent away for their own safety. Today, once again, many will feel a painful sense of separation from their loved ones, but now as then, we know deep down that it is the right thing to do.

1940年当時、14歳だった女王も、10月13日にはウィンザー城から、妹のマーガレット王女に助けられて最初のラジオ放送をしました。家から離れ疎開した子供たちに向けて。

2020年4月、コロナに直面し、イギリスの人びとは、再び愛する人びとと離れなければならないならなくなりました。大学の授業は日本に先駆けてオンラインとなりました。イギリスのロックダウンは日本の緊急事態宣言よりも厳しく、家に親戚や友人を招くことも、老人ホームにいるおばあさん、おじいさんを訪問することもできなくなりました。コロナウイルスという未知の敵に対する新たな戦いでした。

女王は続いて次のように語りかけました。

While we have faced challenges before, this one is different. **This time we join with all nations across the globe in a common endeavour. Using the great advances of science and our instinctive compassion to heal, we will succeed, and that success will belong to every one of us. We should take comfort that while we may have more still to endure, better days will return. We will be with our friends again. We will be with our families again. We will meet again.** But for now, I send my thanks and warmest good wishes to you all.

ただし、今回は、世界中のすべての人びとと共通の努力において手を携える。必ず成功し、より良い日が戻ってくる。そして、必ず、また会える。

ここで、戦いの性質は全く異なっていますが、女王も、語ることで戦いを「支えている」ように思われます。先ほどのチャーチルの演説について考えた点は、女王のスピーチにも当てはまると思います。つまり、聞き手に、「自分たちと同様の状況にあり、それを理解している」と感じさせています。そして、聞き手が、「こうなると良い」と思っている状況、すなわち、「きっと戦いに打ち勝ち、愛する人びととまた会える」と語っています。

女王は戦っているわけではありませんが、「語る」ことで、戦いを支えているように思われます。

以上で、私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。